



文学テキストを活用した学習用英文法の体系構築に向けた複合的アプローチ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小町 将之 |
| 発行年 | 2019-06-20 |
| 出版者 | 静岡大学 |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/00027324 |

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02837

研究課題名(和文) 文学テキストを活用した学習用英文法の体系構築に向けた複合的アプローチ

研究課題名(英文) An integrated approach using literary text to the construction of English grammar for learners

研究代表者

小町 将之 (Komachi, Masayuki)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：70467364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：英語教育において、学習用英文法を効果的に活用するために、英文法体系の批判的検討、文学テキストの効果的活用、学習者の言語知識の様態に関する探究の各観点から、これまでの英語研究に関するさまざまな観点を総合して研究を行った。その結果、日本語を母語とする英語学習者の様態として、その文法知識は、母語に関するのと同様に構造依存性を示すことがわかった。他方、中学校高等学校で用いられる検定教科書を検討した結果、文法記述については、説明方法などにばらつきが見られ、全体として見たときに理論的に矛盾するような体系となっており、学習者の理解に支障を来たし得ることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語学習者の言語知識の様態が明らかになることで、人間が心的に構成する言語知識全体の理解に貢献するとともに、英語教育の観点から、効果的な教材のあり方、および教授方法について具体的な提言を検討することが可能となる。特に、文法指導については、学校教育の機会において質と量において制約が厳しい中で、文法項目ごとに具体的な提言を検討するうえで、基礎的な知見となり得る。文学テキストの活用については、引き続き理論的な調査が必要であるが、教材の素材を検討するうえでの問題提起となり得る。

研究成果の概要(英文)：In order to make effective use of English grammar in education, we conducted research by combining various viewpoints of the knowledge of the English learners, grammatical description, and literary texts. As a result, it was found that Japanese learners of English exhibit structure-dependence in processing English as a foreign language as in their native language (Japanese). On the other hand, as a result of examining the textbooks used in junior-high and high schools, it was found that there is a variation in the grammatical description, and thereby, the system itself involves theoretical contradiction when viewed as a whole. It turned out that it could be a factor that interferes with the understanding of learners. The findings would contribute to the whole understanding of the learners' (mental) linguistic knowledge, and, from the viewpoint of English language teaching, the way of developing effective teaching materials and teaching methods.

研究分野：英語学

キーワード：学習用英文法 英語教科書 コーパス ナラティブ 構造依存性 文学テキスト

1. 研究開始当初の背景

英語教育において、学習用英文法の活用状況は芳しくない。例えば、現在の中・高等学校の教科書では、実際のコミュニケーション場면을重視する言語活動との整合性が十分に取れていないために、文法を活用するような構成になっていないことが多い。また、英文法と読解指導との橋渡しについても十分に行われているとは言えない。一方、文学作品は英語テキストとして洗練されたものであり、深く読みこなすには構文や文法の理解が不可欠である。そのため、文学と文法力は親和性が高いと言えるが、これまで、文学テキストを文法指導へ導入する試みはほとんど行われてこなかった(高橋(2015)『日本の英語教育における文学教材の可能性』や斎藤(2009)『言語と文学』など)。そのため、本研究計画では、外国語教育における文法指導に文学テキストを活用するという視点を取り入れ、文法研究においてこれまで蓄積されてきた知見を文法指導へ有効に活用する方法を調査する。

研究代表者らは、個々に専門とする分野(英語学・文学研究・教材論・コーパス・第二言語習得)の理論の進展に寄与するだけでなく、過去数年間にわたって、所属大学の教養教育に関わる体制の整備に尽力し、大学英語教育における英語学習の促進について、実務的努力に終始せず、学術的知見として昇華するよう努めてきた。その取り組みの成果は、大学英語教育学会第53回大会(小町ほか、2013、於・京都大学)および第54回大会(松野ほか、2014、於・広島市立大学)にて報告している。また、論文を所属する大学の紀要(『静岡大学教育研究』)に複数発表するだけでなく、外部試験機関の教育情報誌(『TOEIC Newsletter, 2011年, No.20』)にもその成果を公表してきた。研究代表者らの所属大学における英語教育の形式的要件を整える経験的過程で、もっとも重要な今後の課題として見出されたのは、リメディアル教育の対象とすべき学習者たちに提供する学習内容として、文法事項を徹底することであった。学習用英文法は、初学者だけでなく「学び直し」の学習者にとっても、適切なレベルの文法的説明を導き出せる理論体系の構築が必要である。コミュニケーション重視の教育方針のもと、カリキュラム上組み込む余地が限定的である状況下において、学習効率の改善に寄与する学習用文法体系の洗練化は急務である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの英語研究(言語理論、文学研究、教材論、第二言語習得論)の成果を多角的に利用して教材としての文学テキストの活用法を体系的に構築しつつ、理論的に整備し、教示および学習の効率改善に寄与する基盤を提供することにある。本研究計画では、その一例として、英文法に着目し文学テキストの英語教育への寄与を調査する。英文法の体系構築は、古来より多様な視点による膨大な蓄積があるが、近年の学校英語教育に関する社会的関心の高まりに伴い、多様な観点から見直しの動きも見られるが、従来の取組みは、その時点における指針の提示や、最新の理論的知見の解説にとどまる側面もあり、文法体系としての再検討の試みは、始まったばかりと言ってよい。このため、以下の4つの観点から、具体的な調査を行う。

学習用英文法体系の再整備および批判的検討

従来、実践知の結晶とされてきた学習用英文法を理論的体系と見なして再整理し、批判的検討を進める。

文学テキストの再評価による教材への活用

従来、内容理解の観点からのみ活用されてきた文学テキストを文法指導へ積極的に活用する方法の可能性を探る。現状では、文学テキストは、発展学習を意図した補助的教材として教科書に組み込まれるにとどまり、文学テキストを文法指導の導入として活用することはこれまであまり実践されてこなかった。

電子コーパス化による分析

現在使用されている中学校・高等学校用検定教科書をデータベース化し、多角的な視点から批判的検討を行う。

実験的方法による検討

行動実験、および実験授業を計画し、得られたデータを多角的に分析しながら、学習者の構築する言語知識の様態への知見を深め、適切な教育方法論を模索する。その際、文学の1つの特徴である「生きた英語」の有用性や非有用性についても議論する。

3. 研究の方法

本研究の体制は次の通りである。

- 研究の総括、文法体系の理論的検討(小町・田村)
- 文学コーパスを活用した文法項目の検証(松野・田村)

- 学習者を対象とする実験研究（高瀬・松野）
- 文学作品の英語教育への活用法の検討（高瀬・小町）

これに加えて、小早川真由美氏（文部科学省初等中等教育局教科書調査官）に研究協力者を依頼した。小早川氏には、文学を取り扱う教材の収集、および文法の指導方法の検討の点において貢献してもらった。研究代表者と分担者は1~2 か月に1回の頻度で研究打ち合わせを開催し、必要に応じて研究協力者による助言を得ることによって、研究体制を維持した。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究の目的で提示した4つの観点から以下のようにまとめられる。

学習用英文法体系の再整備および批判的検討

従来、実践知の結晶とされてきた学習用英文法をひとつの理論的体系と見なして再整理し、批判的に検討した。この観点から、基礎的な重要概念と考えられる「句」の概念について、現行の高等学校用検定教科書における文法記述の実態調査を行った。その結果、1) 句を語数において「2語以上」と定義する説明方法がかなり広まっていること、2) 句のラベルを、中心要素によって定義する仕方と、文中での役割によって定義する仕方が混在していること、がわかった。このことに対して、「句」の概念に関わる解説は現状において理論的一貫性や簡潔性に欠けるものとなっており、学習者にとっては事実上、知的に効果的な役割を果たしておらず、これらの説明方法のばらけ方が、学習者の理解に支障を来す要因になりうることを論じた。

文学テキストの再評価による教材への活用

文学テキストを活用する前提として、文学テキストにかかわる理論的検討を行った。ひとつは、英語文学に関する基礎的研究として、19世紀の海洋小説を代表するエドガー・アラン・ポーの『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』とハーマン・メルヴィルの『白鯨』における所有の概念について考察した。両作品を「所有」(possession)というキーワードから読み解くことにより、海の上や南氷洋の島々を舞台にした作品でありながら、土地獲得の過程や鯨の所有権に関する描写にはアメリカ本土における領土拡張主義政策の影響が色濃く見られ、2人の作家が所有に関する曖昧性や抽象性をあぶり出している様子が見られた。また、文学テキストの構成要因である「語り」に着目し、幼児期における「語り」においてさえスキーマが存在すること、そしてそのスキーマは絵本の語りから抽出されている可能性があることを明らかにした。具体的には、子ども園等での調査を経て、幼児期の「語る」という行為において、実体験を語る「パーソナルナラティブ」と空想物語を語る「フィクショナルナラティブ」において、特に敬体の使用に差が生じることを観察した。

電子コーパス化による分析

教科書に採用されているテキストの性質を多角的に検討する基礎として、高等学校用検定教科書の一部についてデータベース化をすすめ、分析した。特に、教科書においてどのようにn-gram表現が提示されているかを分析した。その結果、n-gram表現は非体系的に提示されていることが示唆され、どの学習段階でどのようなn-gram表現をどれくらいの頻度で提示することが適切であるかを教科書の構成に反映させることができれば学習に役立つと考察された。

実験的方法による検討

いくつかの実験を行い、以下の成果を得た。

- 1) 日本語を母語とする英語学習者を対象に、文法性判断課題および真偽値判断課題にもとづく行動実験を行った。その結果、学習者は、母語の場合と同様、語順にもとづく線的概念にではなく、構造に基づく階層的概念に依存して文処理を行っていることがわかった。
- 2) 2クラスを対比する実験授業を行った。一方のクラスでは、文学テキストの原文を用いて授業を行い、他方のクラスでは、改編されたテキストを用いた。受講前と受講3か月後に大学入試レベルの文法・選択問題を行ったが、残念ながら結果にほとんど差がなかった。
- 3) 英語教科書を検定するという視点にもとづく教材研究のワークショップを企画し、実施した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

Yuko Takase, Possession in Nineteenth-Century American Novels of the Sea: The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket and Moby-Dick, 成蹊英語英文学研究 22, 査読無、2018、39-57

松野和子、英語教科書における n-gram 表現の予備的調査、Ars Linguistica 25、査読有、2018、69-88

小町将之、小早川真由美、高瀬祐子、松野和子、学習英文法における「句」の概念、Ars Linguistica 24、査読有、2017、40-52

〔学会発表〕(計 7 件)

小町将之、小早川真由美、教員志望者を対象とした教材研究ワークショップの試み、第25回大学教育研究フォーラム、2019

Chiaki Matsuzawa, Ayano Otaki, Masayuki Komachi、Negation-Sensitive Items in Second Language Acquisition、JSLs Annual Conference 2019、2019

高瀬祐子、小町将之、小早川真由美、「受講後」を意識して教える - 文学テキストを使用した英語の授業について、第24回大学教育研究フォーラム、2018

Ayano Otaki, Chiaki Matsuzawa, Masayuki Komachi、Structure Dependence in L2 Acquisition: A Case Study with Negative Polarity Items、JSLs Annual Conference 2018、2018

田村敏広、絵本の文体と幼児期の「語り」の関連性について、日本中部言語学会第65回定例研究会、2018

小町将之、小早川真由美、高瀬祐子、松野和子、学習英文法における実態とその課題、第23回大学教育研究フォーラム、2017

Yuko Takase、Hegemony, Inheritance, and Authorship in the Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket、PAMLA (Pacific Ancient and Modern Language Association)、2016

〔図書〕(計 2 件)

中山俊秀、大谷直輝(共編)、岩崎勝一、大谷直輝、大野剛、木本幸憲、佐治伸郎、サドラ一美澄、柴崎礼士郎、鈴木亮子、第十早織、巽智子、田村敏広、長屋尚典、中山俊秀、堀内ふみ野、松本善子、吉川正人(著・各章分担)、ひつじ書房、認知言語学と談話機能言語学の有機的接点、2019、印刷中

下河辺美知子、高瀬祐子、日比野啓、舌津智之、巽孝之、小鳥遊書房、アメリカン・マイノリティの音声、2019、344(27-51)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：松野 和子

ローマ字氏名：(MATSUNO, kazuko)

所属研究機関名：静岡大学

部局名：大学教育センター

職名：准教授

研究者番号(8桁)：80615790

研究分担者氏名：高瀬 祐子
ローマ字氏名：(TAKASE, yuko)
所属研究機関名：静岡大学
部局名：大学教育センター
職名：特任助教
研究者番号（8桁）：30708433

研究分担者氏名：田村 敏広
ローマ字氏名：(TAMURA, toshihiro)
所属研究機関名：静岡大学
部局名：情報学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：90547001

(2)研究協力者
研究協力者氏名：小早川 真由美
ローマ字氏名：(KOBAYAKAWA, mayumi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。